英国の教育政策のおける伝統文学教育－シェイクスピアの政治利用

青木　敬子	比較社会文化学専攻

期間	2008年１月18日～１月27日
場所	イギリス
施設	１月18日～１月19日　ロンドン：ロンドン大学大学院教育研究科 １月20日～１月23日　リーズ：ブラントクリフスクール、ホーブリースクール １月24日　ロンドン：ケント、ウィルミントン女子グラマースクール １月25日～１月26日　ロンドン：ロンドン大学大学院教育研究科図書館

内容報告

１．導入

近代ヨーロッパにおける、国民国家、文学という概念は日本に大きく影響を与え、作用したと考えられる。ハルオ・シラネによると[1]これは特に明治期にあった自国語、言語教育への政治的関与であったとされ、それと関連する19世紀のヨーロッパにおけるナショナリズムの特徴の１つが次のように言及されている。「最も際立った特徴の一つは、国民的アイデンティティの基盤として、言語に焦点が当てられたこと、つまり国民は共通の国語にその基盤を置き、国語によって統合されると信じられていたことである。」例えばイギリスではかつて文学研究は、ギリシャ・ローマの古典研究をさす時代もあり、学校教育の中でもかつてグラマースクールでは、ギリシャ・ラテン語教育がなされていた。1988年以来のナショナルカリキュラムにより、自国語である国語、つまり英語教育の強化は大変顕著である。国家統制によるカリキュラムより20年を経た今でも、日本と同様イギリスにおいても、学力の問題を抱え、その学力が国語教育によると考えられている。さらに自国語教育を行うことにおいて、イギリスではシェイクスピアが非常に影響力をもつ。ナショナルカリキュラム以来、中等教育において特に英語教育では、決められた作家の作品教育をすることで英語力、国語力をつけることを目的としている[2]。国語教育においてどの作家を選ぶかという問題は非常に大きい問題ではあるが、20年の時を経た今でもシェイクスピアが、その作家リストからははずれたことがない。この研究を行うことの意義は、まず国語教育におけるシェイクスピアの関与、影響について調査することにより、いかに文学テクストが流通し、受容されながら、国民形成につながるかを考察することにある。イギリスにおいて、国語教育はシェイクスピアを教育することを通して、国民的アイデンティティの基盤ともなるという考えのもとに教育を行っているか、または政治的関与があるのかを継続調査しながら考察したい。今回の調査ではナショナルカリキュラムにおけるシェイクスピア教育をするという国家的関与を教育現場ではいかに対応しているのかなどを観察し、また学校や地域による格差も含めて比較検討しながら、文学テクストの位置づけを確認するものである。このような調査研究は日本においても、文学テクストをいかに教えるかについて、共通するテーマであると考える。今回の調査を博士論文の中では、最初の章にナショナルカリキュラム変遷とともに、現在の中等教育調査具体事例に含め、その後の章においては英文学教育において、シェイクスピア教育と文学理論との関わりについて、イギリスの高等教育前（シックスズ・フォーム）より高等教育段階へと発展させて論ずる予定である。

２．調査概略

18年度学生海外調査において訪問した、イギリス北西部のリーズの学校（ブラントクリフスクール）を再度訪問し、授業内容の変化、（ここでは特にシックスズ・フォームに焦点をあてた）経緯を追った。さらにリーズにおいて比較するための新しい学校（ホーブリースクール）において、中等教育キーステージ３の授業、２クラス見学した。さらにこの学校がスペシャリスト・ランゲージ・カレッジでもあったことより、日本語のクラスも見学し、生徒への学習サポートの経験をさせてもらった。これらはみな前回と同様、各学校のニュースレター編集者である、リーズのリチャード・ウィルコックス氏がアレンジし、さらに同行してくださった。さらにリーズ以外の地域で前回とは別な

角度での調査ができた。ロンドンのグラマースクールを訪問できたことである。しかしながら急な予定をいれてもらったことや、学校のセキュリティの厳しさより、授業見学はできず、英語教員へのインタビューのみ実現した。これについては、国立教育政策研究所の研究協力者としての仕事を通して親交を深めた、インド教育省の研究機関のディレクターである、クリシュナ・クマール教授とその夫人フランシスのサポートによるものである。さらに現地英国ではジョン・オクスヘム教授がグラマースクールへの連絡を、その学校の科学の教員であるピーター・マジソン氏ととってくださったことにより英語科教員へのインタビューが実現した。またオクスヘム教授は学校へも同行してくださり、彼の紹介によって厳しいセキュリティも全く問題が生じなかった。このケントにあるウィルミントン女子グラマースクールは、イギリスの上位20％の生徒のみが入れるエリート校である。別な経由で当初ロンドンでの中等学校の調査を行う予定であったがそれが叶わず、よってこの特別な調整によってできたインタビューは非常に意義深いものであった。ご尽力を下さった方々に心より感謝申し上げたい。

３．見学報告

①　ブラントクリフスクール

前回訪問したときのペリー氏は退職していたため、新しく着任したばかりというポーラ・スティーヴンソン氏のシックスズ・フォーム演劇クラスを見学した。教材は２種類使用している。１つはショーン・オケーシーの『銃士の影』で、もう１つはシェイクスピアの『夏の夜の夢』を授業教材としていた。生徒は４人で通常クラスはドラマスタジオで教材の読み合わせとその表現、および教材２作品の比較討議をしている。さらには自由表現の練習を行う。今回の見学では最初の５分、生徒へ質問時間をもらった。生徒たちはシェイクスピアについては英語の教材としての意識が強く、演劇作品としてどう考えているかを質問したが、あまり興味がなかった。このドラマのクラスを選択した理由はみな、演劇作品よりミュージカルに興味があるためであった。スティーヴンソン氏によるとシェイクスピア作品が基になって、ミュージカルが制作されていることを教えている。シェイクスピアの普遍的テーマを教えたいという希望はあるが、生徒の実際のレベルではシェイクスピアを教えることはかなり難しいとのことであった。リーズ周辺でミュージカルを気軽に観ることができるので、商業的にもミュージカルがイギリスで盛んになっていることを象徴しているようであった。

②　ホーブリースクール

リーズより西のウェイクフィールドに位置する学校で、学校規模としてはブラントクリフより小さいが、生徒は学習意欲が非常にある。スペシャリスト・ランゲージ・カレッジであり、生徒たちはＧＣＳＥ（中等教育修了資格試験）のために、語学を選択して学習する。母国語以外にスペイン語、フランス語、中国語、日本語があり、自由選択している。今回はこの日本語クラスも見学した。以下見学クラスの報告である。

ａ．キーステージ３：『ロミオとジュリエット』

前提として、映画（バズラーマン版）を見て全体のあらすじを学習している。ロミオとジュリエットのクラスは、テクストのソネットの復習と演習であった。教師であるドズリー氏はソネットの形式や特徴をリズミカルに質問し、生徒が答える。知識問題にも対応できるような基本事項に対してほとんど生徒は答えることができる。次にソネットの部分を教師が音読して聞かせる。さらに２人の生徒が、ロミオ役、ジュリエット役になり、１人がソネットを音読し、それにあわせて表現するというロールプレイもあった。授業構成バランスがよく、生徒が静と動を繰り返すように、次々と取り組む授業であった。後半はほとんどテクストの内容に取り組む。17世紀の宗教の影響や背景などを話した上で、ソネットに使用されている宗教に関わる単語を拾う。またキーステージ３の修了時にあるテストに出題されそうなドリルプリントを最後の５分で仕上げる。授業時に気づいたのは、まったくシェイクスピアに興味がない様子でいる生徒が、知識問題に突然手をあげて答えたりするので、表面上だけでは生徒が理解できないと痛感した。後日談ではあるが、見学した生徒たちは、学力が高い生徒であり、反応が速く授業が充実している。（ドズリー氏からのコメント）

ｂ．キーステージ３：『から騒ぎ』

このクラスでも前提としては映画（ケネス・ブラナー版）をみて、全体のあらすじを学習している。最初に担当教師バーカー氏が４人の生徒を選び、それぞれに『から騒ぎ』の役をあたえる。生徒はもらった役の名前をシールに書いて、制服にはりつけ、教室の４隅にむかう。次に缶をだして、生徒１人１枚の紙をひかせて、音読させる。その紙にはテクストのセリフがかかれているため、１回１回誰のセリフかをクラス全員に尋ね、セリフをひいた本人か、他のメンバーが答える。そうして、４人の役へとクラス全員が振り分けられる。このセリフはカリキュラムコントロール（Q

ＣＡ）からあらかじめ出されているテクストの一部である。驚いたのは、生徒がせりふを聞いて、即座に誰のせりふかを答えられることであった。せりふを一通り確認したあと、全体のあらすじをまとめていく。教師はプロジェクターとパソコン、パワーポイントを使って、画面で質問をだし、生徒が答えるとすぐに答えを画面でだす。生徒はノートへ書き取る。この繰り返しにより、作品全体の内容をまとめあげる。授業構成、進行がスムーズな分、教師は生徒に目をむけられる。最後の５分で作品テクストに沿って、内容をまとめる確認用のプリントを配り、生徒は文章に適した単語をうめる。

授業後、バーカー氏からのコメントでは、非常に優れた生徒が多いクラスなので、授業が早くすすめられ、理想的なクラスということであった。

ｃ．日本語クラス（放課後のＧＣＳＥテスト準備クラス）

放課後の特別補講なので全員で５人であった。正課のクラスではないので、問題集に取り組む、塾のようなクラスであった。2007年の夏に正課のクラスで日本旅行に出かけたこともあって、見学のために教室に入ると、生徒の喜ぶ顔が印象に残った。担当教師木下氏が１人で問題集の補習をするには十分にケアができないようであった。生徒たちは選択からマークするテストに備えている。問題集は日本語、英語それぞれの質問を読んで、答える。質問に日本語で作文をして答えるというのは生徒たちにとってはかなり難しく、また答えが１つにならない質問や、どのように答えるべきか、わからないような曖昧な質問もあった。日本語学習者にとっての一番の難問が助詞であることを、筆者はあらためて認識した。後日別な機会でリーズにあるグラマースクールで、かつて日本語教師をしていたというイギリス人と会い、この難解な問題集の話をしたが、実際準備用マークシートの問題をやらせていけば、試験には合格させられるということをきいた。それが学校のレベルによるものかは継続調査が必要である。

ホーブリースクールでの授業見学は十分できたが、教員のスケジュールがタイトでインタビューをする時間がなかった。教員からは生徒のレベルの高さについてコメントがあったが、学校全体としてはテスト結果データなどから、客観的考察が必要となる。

４．インタビュー報告：ウィルミントン女子グラマースクール

ロンドン中心からおよそ30分、ケントに位置するグラマースクールの英語教員バーバラ・ウィルソン氏へ30分のインタビュー時間をもらった。インタビュー内容掲載の許可はすでに承諾済みである。小規模であるが、メインの校舎以外に道路を隔て別棟の校舎もある。またシックズ・フォームになると、近隣の男子校と合同授業もあり、非常に興味深い。これらの詳細について追跡調査するべき内容がある。今回は渡英１週間前にアレンジし、英国に到着後時間設定があったため、急な申し出によって実現した訪問であった。インタビューは、筆者がなぜこのような調査を行っているかということからはじまり、ナショナルカリキュラムについて、義務化されたシェイクスピアへの批判がいかに多く、中等学校でシェイクスピア教育が崩壊しているかという記事を読んだことなどを導入として話した。そこでウィルソン氏はまずこのグラマースクールは非常に知識レベルが高いということを強調し、ここではそのような記事の状況には当てはまらないことを明言した。シェイクスピアはキーステージ２から始まり、テストのための学習段階ではないからこそ実現できるシェイクスピア学習がある、という話から始まった。順に段階ごとの学習内容を下記に報告する。

キーステージ２（13歳）

教材は『夏の夜の夢』である。演劇のイメージをこのようなファンタジーから作るのは他の作品よりシェイクスピア理解を促しやすい。実際の演劇上演をリージェントパーク（ロンドン中心）へ観に行く。観劇をし、悲しさ、おもしろさ、すばらしさという感性が育てられる。ウィルソン氏はそのような活動を通して劇的なイメージというものが形成されるのが、13歳レベルのシェイクスピアであるという。

キーステージ３（14歳）

『から騒ぎ』を学習する。この段階は統一テストが始まるので、演劇テクスト全体を学習する。（テストの準備のために詳細を学習）しかし一方で演劇教育のグループが学校へ来て、パフォーマンス、ワークショップをする。そして演劇の内容のみを生徒に質問する。これは学習内容の質問ではないので、演劇についてイメージを深めるのによい。またこの段階になると生徒はせりふの中でメタファーを考える。

キーステージ４（15歳）

『ロミオとジュリエット』または『マクベス』を学習する。この時期にはただ面白い、またはファンタジーというよりは、宿命、復讐、嫉妬、裏切り、殺戮などのテーマも含めて作品を学習する。また歴史的な

知識、エリザベス朝の背景をもちいながら、学習する。

－シックスズ・フォーム
（キーステージ５）（16歳）
教材は『オセロー』である。近隣の男子校の生徒と合同クラスになり、作品もさらに深く学習する。例えば、セクシュアリティ、フェミニズム、父権、人種というテーマも扱い、さらに嫉妬、傲慢（hubris）についてもディスカッションする。この段階では男子は権力、父権などについて非常に理解できるという。ウィルソン氏は一方女子はその男子のコメントなどを受け、テーマを深める学習ができると考えている。キーステージ５に以前この学校のアメリカ人スタッフが授業見学に来たときに、人種、黒人、差別などのテーマを非常に直接的表現で説明し、また討論しているのに驚いたという。アメリカではこのテーマで討論できないといわれたそうだ。

上記の内容からも明確であるが、ウィルソン氏は授業内容を特に統制して学習させるというより、適した段階でテーマを深め、抑制はしないと明言している。むしろhubrisはギリシャ語であるがそのことばでしか表現できないようなものを大切にしたいと話した。たとえばhubrisのように日本語でしか表現できないそのままの単語で使われるものはあるか、と逆に質問された。「英語以外の言葉であっても、その言葉を大切に使いたい」非常に興味深いコメントであった。テンペストについては来年度から義務付けられるのでおそらく、キーステージ４では教材として使用すると話していた。ただいくらＱＣＡからのテクストが指定されても、テクスト全体を学習し、適した段階で適したテーマを用いて授業することになると話している。

５．入手資料について

書店にて入手した資料は、キーステージ３から４までのシェイクスピア教材で、いずれもオフィシャルなテクストではなく、（ＱＣＡよりダウンロードするものがシェイクスピアのオフィシャルな教材となる[*3)]参考書、問題集のようなものである。しかしながら、この中で以下のように特徴をまとめることができる。１．キーステージ３と４の問題集について、中には非常に易しくイラスト、漫画でシェイクスピアのスクリプトが描かれている。２．いずれも授業で使われていたような、穴埋めドリルが含まれている。（SATテスト対策として）３．（キーステージ５）シックズ・フォーム、Ａレベル、ＡＳレベル（大学入学前試験）のテクストは大学レベルの文学理論が紹介されている。この３点のうち１、２と３の特徴の間には学習レベルにかなりの差があるように思われる。

６．調査からの考察

2006年に追加改訂された英語教育の政策で、ＱＣＡのシェイクスピア作品の一部テクストをテストのために指定しても、テクスト全体を上演、パフォーマンスで学ぶということが謳われている[4]。今回の調査では、見学した学校ではそれについては実行されていた。ロンドン近郊は演劇をみることができると考えていたが、リーズでもGCSE前に学校から有料ではあるが、リーズ市内で観劇を行う予定があった。ただその前に映画を見ることは劇全体のあらすじを生徒が把握するのに、最良の方法であるようだ。しかしながら、教育現場をみるとやはりテストに追いつくための授業が中心となっていて、知識レベルで追いついていけるよう努力しても、作品テーマについては多くの学校でとりあげるのは、難しいように思われる。今回のインタビューより、グラマースクールの状況は特に今後、継続調査したいと考える。中等教育政策で、文学教育を通して目標として掲げている内容以上、おそらく文学テクストの意味、文学教育の意義が、グラマースクールでは掌握されているとインタビューによって認識した。統制されている教育とは各段階における試験の部分ではある。しかしながらその内容以上に、授業内容自体にも学校格差があり、階級社会を根強く残している。

７．結び

The English Associationの機関紙The Use of Englishにおいて、ここ最近の論文をロンドン大学大学院の図書館で入手したが、学校における文学としてのシェイクスピア作品教育について、今かかえている問題は、今までの文学教育論点のみでは対応できないことがあげられていた[5]。例えばシェイクスピア作品を教える時に、シェイクスピア作品が今のメディアでどのように使われているかを教えることが、新しいメディアを動かす生徒たちへの教育かという問題点があげられる。これはグラマースクール以外の学校で今回非常に印象に残った。シェイクスピアを現代にあてはめなければ教育できない現状なのか。しかしながら、グラマースクールの状況を発展調査することは、現代イギリスの文学教育において新たな発見の可能性を示唆している。特別な学校としてグラマースクールをとらえることなく、イギリスの現状として、政策上義務化された

シェイクスピア作品の国語教育での位置づけを考えるのには、グラマースクールの調査は非常に重要な鍵となる。

この調査報告は、現代イギリス教育研究会（主催：国立教育政策研究所　佐々木毅氏）における口頭発表や、国際表現言語学会第２回大会（カナダ　ビクトリア大学にて2009年）での口頭発表および投稿にて、詳細を調えた上で報告したいと考えている。

注

１．ハルオ・シラネ「国文学の形成」『岩波講座　文学13』岩波書店　2003年
２．http://www.dfes.gov.uk/consultations/search.cfm
３．http://www.qca.org.uk/qca_9091.aspx
４．http://www.qca.org.uk/qca_9091.aspx
５．Stevens, Jenny. `Not of an age, but for all time? The Changing Face of Shakespeare in School'. The Use of English, The English Association, Leicester, 2005. Vol 57

参考文献

Cox, Marian. AS/A-Level Student Text Guide Othello William Shakespeare, Philip Allan,:London, 2003.
Davies, Chris. What is English Teaching?, Open UP, Buckingham, 1996.
Eagleton, Terry. Literary Theory, Blackwell, Oxford, 1983.
エドワード・W・サイード『文化と帝国主義１』大橋洋一訳　みすず書房　1998年
http://www.cgpbooks.co.uk

あおき　けいこ／お茶の水女子大学大学院　比較社会文化学専攻　博士後期課程３年

【指導教員のコメント】

青木敬子さんは、シェイクスピア受容をとおして英国の国語教育がいかに国民形成に繋がるかというテーマでの博士論文執筆の資料として、当地での実地調査研究をおこなったが、これは一昨年度、本学「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」で青木さんが実施した学生海外調査を継続発展させたものであり、調査資料の相対化という点で実り多いものとなった。本調査研究をとおして、英国の中等教育関係者との研究上のコネクションも強固になり、青木さんの博士論文の眼目ともなる理論研究と実地調査、文学分析と教育学の連動への道がさらに開けた。文学テクストの社会的・政治的占有というテーマを、現在進行中の教育システムや現場から追跡する当研究は、日本の文脈においても有益な示唆を与えるものと思われる。さらなる調査が待たれる。

（人間文化創成科学研究科　教授　竹村　和子）